

## 浅間山の火山活動解説資料（平成 22 年 5 月）

気象庁地震火山部  
火山監視・情報センター

火山活動に特段の変化はなく、山頂火口から500mを超える範囲に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。ただし、山頂火口から500m以内に影響する程度の噴出現象は突発的に発生する可能性がありますので、火山灰噴出や火山ガス等に警戒が必要です。

平成 22 年 4 月 15 日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（平常）に引き下げました。その後、予報警報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

## ・ 噴煙など表面現象の状況（図 2、図 3-①②、表 1）

山頂火口からの噴煙量に大きな変化はなく、噴煙高度は火口縁上 100～300m と低い状態で推移しています。

## ・ 地震や微動の発生状況（図 3-⑤⑥⑦⑧、図 4\*、表 1）

火山性地震はやや少ない状態で経過しました。2009年2月2日の噴火前にみられたような周期の短い火山性地震（BH型地震）の増加は認められません。発生した地震の多くはBL型地震で、これまで同様、山頂火口直下のごく浅い所で発生したと推定されます。火山性微動は少ない状態で経過しました。

## ・ 山頂火口内の熱の状況

5月25日に陸上自衛隊の協力により上空からの観測を行いました。強風と雲の接近のため山頂火口に近付くことができず、地表面温度観測を実施できませんでした。

## ・ 火山ガスの状況（図 3-③、表 1）

6日及び18日に行った現地調査では、山頂火口からの二酸化硫黄放出量は、一日あたり100～300トン及び100～400トンと、2009年2月の噴火以降減少しており、2008年7月以前の静穏な状態に戻りつつあります。

## ・ 地殻変動の状況（図 3-⑨⑩）

山体周辺の GPS 連続観測では、2008年7月初め頃からみられていた深部へのマグマの注入を示す伸びの傾向は、2009年7月頃から鈍化し、2010年1月頃からわずかに縮みの傾向がみられます。傾斜観測<sup>1)</sup>及び光波測距観測<sup>2)</sup>では特段の変化はみられません。

1) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等による変化を観測します。

2) レーザなどを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定する機器。山体の膨張や収縮による距離の変化を観測します。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ (<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 22 年 6 月分）は平成 22 年 7 月 8 日に発表する予定です。

※この記号の資料は気象庁のほか、国土交通省利根川水系砂防事務所、東京大学、独立行政法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『2万5千分1地形図』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。

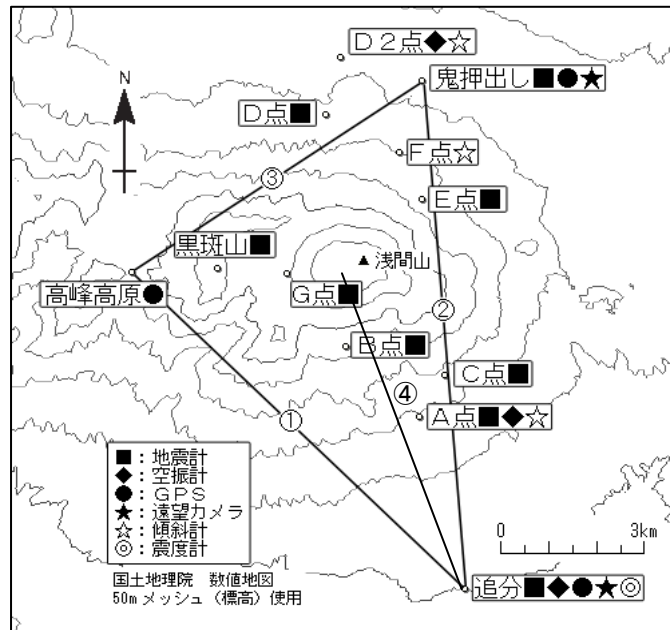


図 1 浅間山 気象庁の観測点配置図（小さな白丸は観測点位置を示しています）  
GPS 基線③は図 3 の⑨に、光波測距測線④は図 3 の⑩にそれぞれ対応しています。

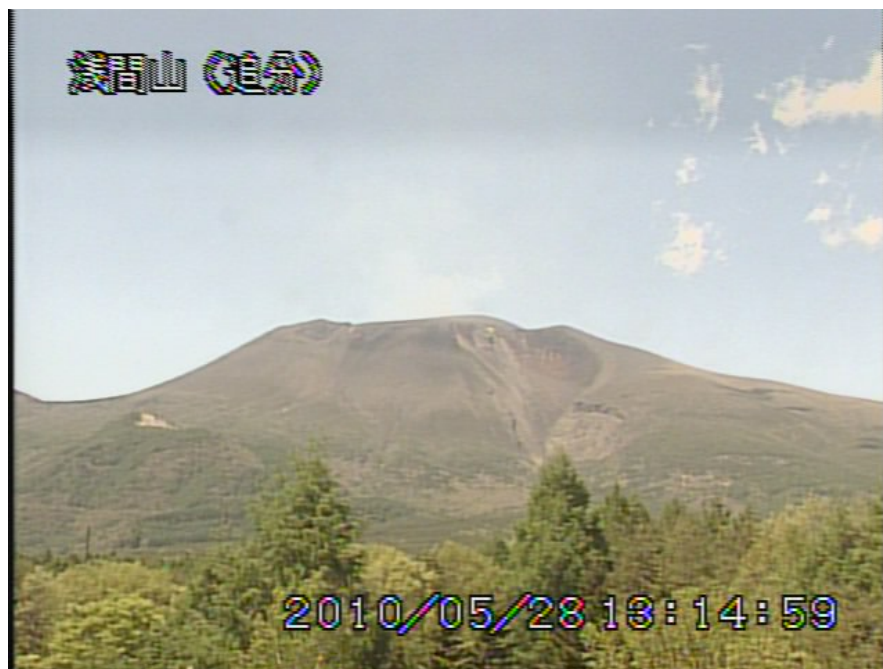


図 2 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
（5月28日、追分カメラによる）

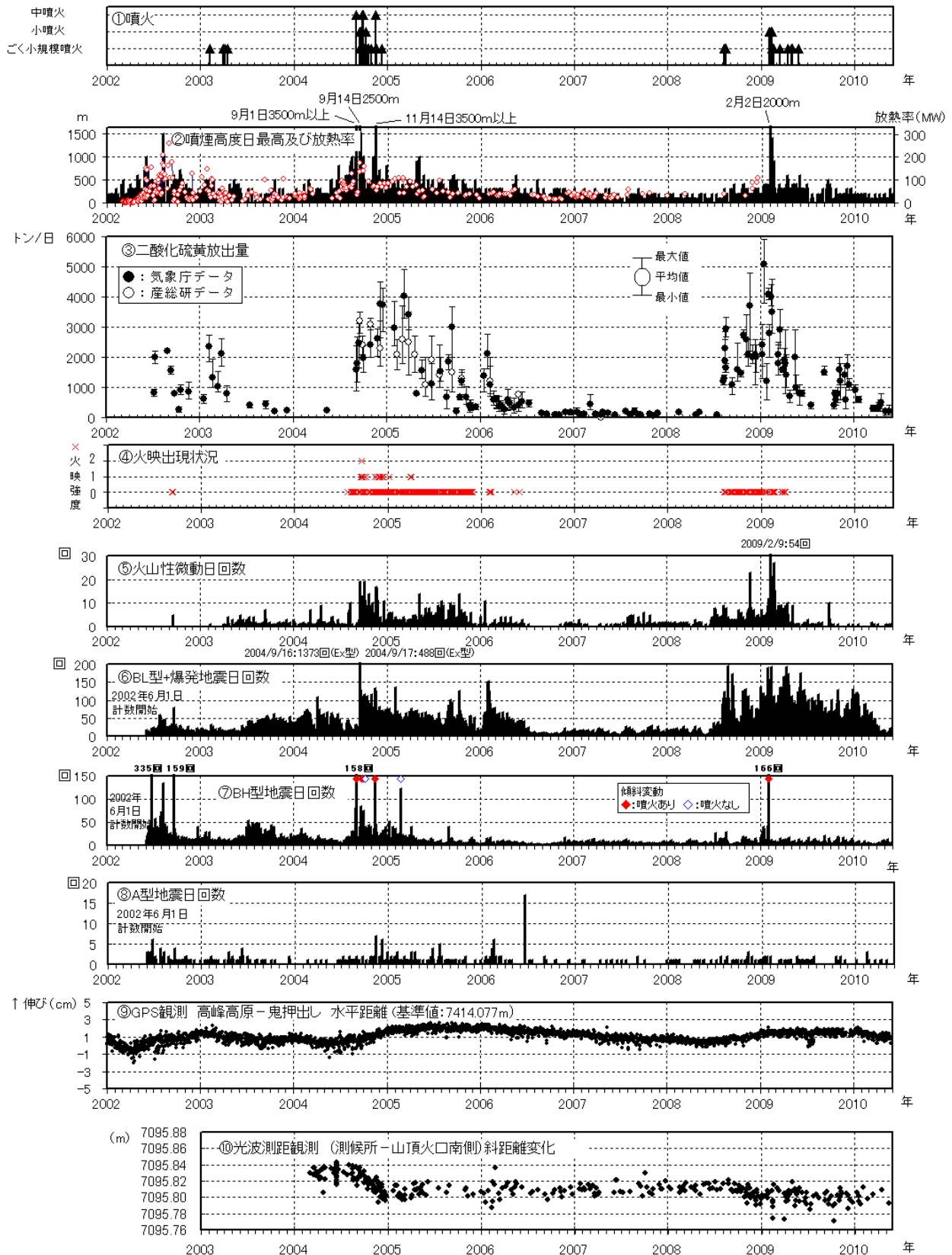


図 3※ 浅間山 最近の火山活動の推移（2002 年 1 月 1 日～2010 年 5 月 31 日）

- ③ 独立行政法人産業技術総合研究所による観測結果が含まれています。
- ④ 5 ページの脚注 5) を参照。
- ⑥⑦⑧ 地震の種類別（図 5 参照）に計数を開始した 2002 年 6 月 1 日からのデータを掲載。
- ⑩ 1 ページの脚注 2) を参照。分解能の高い気象モデルによる補正を実施。

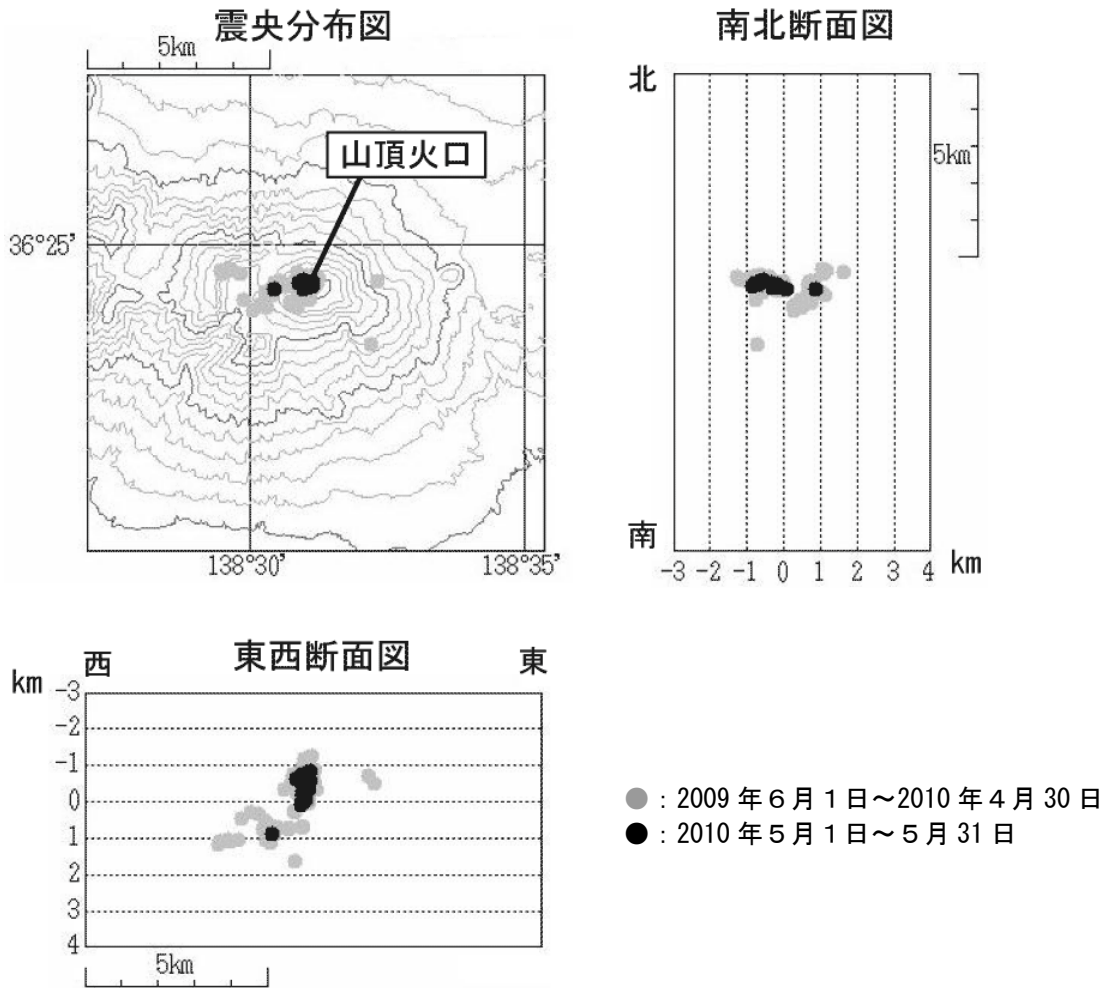


図 4※ 浅間山 震源分布図 (2009年6月1日~2010年5月31日)

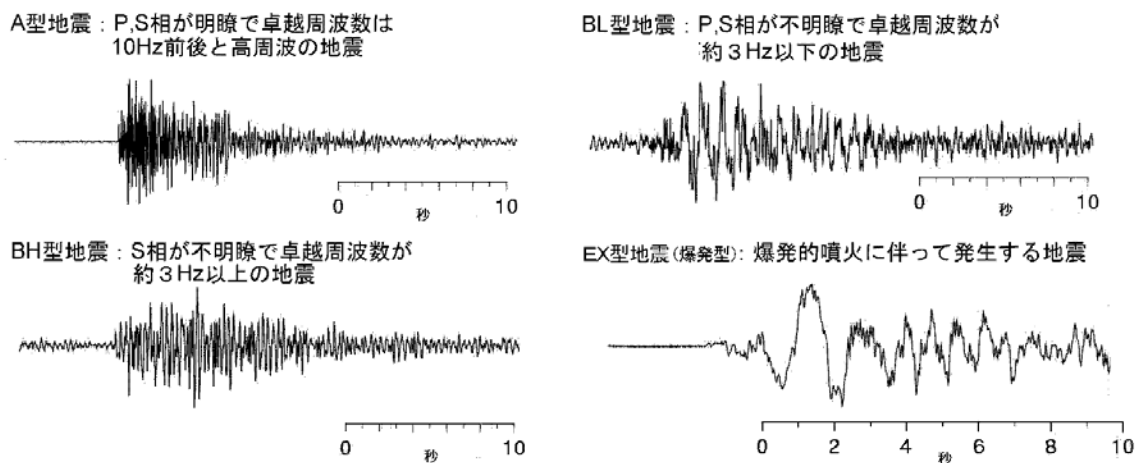


図 5 浅間山 主に発生している火山性地震の特徴と波形例

表 1 浅間山 2010 年 5 月の火山活動状況

5月	噴火回数	火山性地震の回数 3)						微動回数	噴煙の状況 4)		火映強度 5)	備 考
		A型	BH型	BL型	Ex型	その他	地震合計		日最高 (m)	噴煙量		
1日	0	1	4	7	0	0	12	0	50	1	-	
2日	0	0	3	13	0	0	16	0	100	1	-	
3日	0	0	7	16	0	0	23	0	100	1	-	
4日	0	0	3	8	0	0	11	1	-	-	-	
5日	0	0	8	3	0	1	12	0	50	1	-	
6日	0	0	8	4	0	0	12	0	100	1	-	二酸化硫黄放出量: 100~300トン/日
7日	0	0	6	6	0	0	12	0	×	×	-	
8日	0	0	6	4	0	0	10	0	100	1	-	
9日	0	0	4	10	0	0	14	0	50	1	-	
10日	0	0	7	6	0	0	13	0	50	1	-	
11日	0	0	5	3	0	0	8	0	×	×	×	
12日	0	0	3	10	0	0	13	0	×	×	-	
13日	0	0	14	6	0	0	20	0	50	1	-	
14日	0	0	6	8	0	0	14	0	×	×	-	
15日	0	0	2	10	0	0	12	1	200	1	-	
16日	0	0	1	6	0	0	7	0	300	1	-	
17日	0	0	0	11	0	0	11	0	200	1	-	
18日	0	0	4	13	0	0	17	0	100	1	-	二酸化硫黄放出量: 100~400トン/日
19日	0	0	3	8	0	0	11	0	×	×	-	
20日	0	0	2	15	0	0	17	0	×	×	-	
21日	0	0	1	22	0	0	23	0	100	1	-	
22日	0	0	3	16	0	0	19	0	200	1	-	
23日	0	0	0	16	0	0	16	0	×	×	-	
24日	0	0	5	8	0	0	13	1	×	×	×	
25日	0	0	2	5	0	1	8	0	100	1	-	
26日	0	0	2	7	0	0	9	0	×	×	×	
27日	0	0	1	5	0	1	7	0	×	×	-	
28日	0	0	2	7	0	0	9	0	200	1	-	
29日	0	0	1	6	0	0	7	0	×	×	-	
30日	0	0	1	4	0	0	5	0	×	×	-	
31日	0	0	1	5	0	0	6	0	×	×	-	
合計	0	1	115	268	0	3	387	3				

- 3) 火山性地震の計数基準はB点で最大振幅  $0.1 \mu\text{m}$  以上、S-P時間3秒以内です。  
火山性地震の種類は図5のとおりです。
- 4) 噴煙高度と噴煙量は定時観測（09時・15時）の日最大値です。噴煙量は以下の7階級で観測しています。  
1：極めて少量　2：少量　3：中量　4：やや多量　5：多量　6：極めて多量  
7：噴煙量6以上の大噴火。噴煙が山体を覆うぐらい多く、噴煙の高さは成層圏まで達したとみられる  
-：噴煙なし　×：不明
- 5) 火映の強度は以下の4段階で観測しています。※  
0：肉眼では確認できず、高感度カメラのみ確認できる程度　1：肉眼でようやく認められる程度  
2：肉眼で明らかに認められる程度　3：肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度  
-：火映なし　×：視程不良（終日観測できなかった場合）
- ※) 長野県建設部佐久建設事務所の黒斑山設置のカメラを監視に用いることによって、2008年7月より火映の検知能力が向上しています。